

# 説話文学の文章の研究(三)

土屋博映

## 1 はじめに

文章・文体という領域が、国語学の中でも研究のおくれた分野であることは、前回、前々回の紀要論文で既に、くりかえしのべたことである。

研究がおくれているというのは、方法論が確立されていないからである。それは、その対象の不鮮明さに起因するのである。しかし、だからといって、手をこまねいているわけにはいかない。とらえどころがないとは言え、現実に「文章」そのものは厳然として存在するのであるから。

そこで、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』という作品を實際にとりあげ、またその文章表現そのものの相違を、具体的に検討していく、そう考えてはじめたのが、本研究であった。

今回もそういう方針をふまえ、紀要に投稿させていただく次第である。

## 2 『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』

管見によれば、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』で、ほぼ類話と考えられるものは、五十七話であること、これも既にのべたことである。本稿では前回の紀要にひき続き、『今昔物語集』本朝の部の卷二十八以降で、『宇治拾遺物語』との類話を比較してみることにする。

2・6 左京属紀茂経、鯛荒卷進大夫語第三十(卷二十八)

今昔、左京ノ大夫□ノ□ト云  
フ、古君達有ケリ。

年老テ極ク古メカシケレバ、殊ニ  
行キモ不為デ、下辺ナル家ニナム

籠リ居タリケル。  
而ルニ、其ノ職ノ属ニテ、紀茂経

今は昔、左京の大夫なりける古上  
達部ありけり。

年老て、いみじうふるめかしかり  
けり。しもわたりなる家に、あり

きもせて籠居たりけり。そのつか  
さの属にて、紀用経といふ者有け

ト云フ者有ケル。<sup>(6)</sup>

長岳ニナム住ケル。<sup>(7)</sup>

其ノ職ノ属ナレバ、彼ノ大夫ノ許<sup>(8)</sup>

ニ時々行テナム棍ケル。<sup>(9)</sup>

而ル間、茂経、宇治殿ノ盛ニ御<sup>(10)</sup>

マシケル時ニ参テ、贄殿ニ居タル<sup>(11)</sup>

程ニ、<sup>(12)</sup>

淡路ノ守源ノ頼親ノ朝臣ノ許ヨリ<sup>(13)</sup>

鯛ノ荒卷ヲ多ク奉タリケルヲ、贄<sup>(14)</sup>

殿ニ多取置ケルニ、<sup>(15)</sup>

贄殿ノ預<sup>(16)</sup>□ノ義澄ト云フ者ニ、茂<sup>(17)</sup>

経其ノ荒卷ヲ三卷取テ、<sup>(18)</sup>

「我が職ノ大夫ノ君ニ、此レ奉テ<sup>(19)</sup>

棍リ申サム」ト云テ、此ノ荒卷三<sup>(20)</sup>

卷ヲ間木ニ捧置テ、義澄ニ云、「此<sup>(21)</sup>

ノ荒卷三卷、人ヲ以テ取リニ奉ラ<sup>(22)</sup>

ム時ニ遣ハセ」ト云置テ、義澄ハ<sup>(23)</sup>

殿ヲ出テ、左京ノ大夫ノ許ニ行テ<sup>(24)</sup>

見レバ、大夫ハ出居テ客人二三人<sup>(25)</sup>

許来タリ。<sup>(26)</sup>

大夫、其ノ主セムトテ、九月ノ<sup>(27)</sup>

あるじせんとて、地火爐に火お<sup>(28)</sup>

り。

長岡になん住ける。<sup>(29)</sup>

つかさの属なれば、此大夫のもと<sup>(30)</sup>

にも来てなんをとづりける。<sup>(31)</sup>

この用経、大殿に参りて、贄殿<sup>(32)</sup>

にゐたる程に、<sup>(33)</sup>

淡路の守頼親が、鯛のあら巻を多<sup>(34)</sup>

くたてまつりたりけるを、贄殿に<sup>(35)</sup>

もて参りたり。<sup>(36)</sup>

贄殿のあづかり、よしずみに、二<sup>(37)</sup>

卷用経こひとりて、<sup>(38)</sup>

まきにさゝぐけて置くとして、よしず<sup>(39)</sup>

みに云やう、「これ、人してとり<sup>(40)</sup>

に奉らん折に、おこせ給へ」とい<sup>(41)</sup>

ひ置く。心の中に思けるやう、こ<sup>(42)</sup>

れわがつかさの大夫にたてまつり<sup>(43)</sup>

て、音づり奉らんと思て、これを<sup>(44)</sup>

ま木にさゝぐけて、左京の大夫のも<sup>(45)</sup>

とにいきてみれば、かんの君、出<sup>(46)</sup>

居にまらう人二三人ばかり来て、<sup>(47)</sup>

あるじせんとて、地火爐に火お<sup>(48)</sup>

あるじせんとて、地火爐に火お<sup>(49)</sup>

下句許ノ程下ノ事ナレバ、地火爐<sup>(50)</sup>

ニ火□ナドシテ、<sup>(51)</sup>

物食ハムト為ルニ、墓々シキ魚モ<sup>(52)</sup>

ナシ、鯉・鳥ナドモ用有気也。<sup>(53)</sup>

其レニ、茂経指出テ申ス様、「茂経<sup>(54)</sup>

ガ許ニコソ撰津ノ国ニ候フ下人ノ<sup>(55)</sup>

鯛ノ荒卷四五卷許、今朝持来リテ<sup>(56)</sup>

候ツルヲ、一二卷ハ宿ノ童部ト共<sup>(57)</sup>

ニ食ベ試候ツルニ、艶ズ微妙ク<sup>(58)</sup>

鮮カニ候ヒツレバ、今三卷ハ穢シ<sup>(59)</sup>

不候ハズシテ置テ候ツルヲ、<sup>(60)</sup>

忝テ罷リ出デ候ツル程ニ、下人ノ<sup>(61)</sup>

不候シテ、否持参リ不候ザリツル<sup>(62)</sup>

ニ、只今取ニ遣サムハ、何ニ」ト<sup>(63)</sup>

音ヲ捧テ、<sup>(64)</sup>

シタリ顔ニ去張リテ、口脇ヲ下<sup>(65)</sup>

ゲ、袖䟽ヲシテ、延上テ申セバ、<sup>(66)</sup>

左京ノ大夫、「可然キ物ノ只今無<sup>(67)</sup>

カリツルニ、糸吉キ事カナ。疾ク<sup>(68)</sup>

取ニ遣レ」ト云フ。<sup>(69)</sup>

のたまふ。<sup>(70)</sup>

こしなどして、<sup>(71)</sup>

我もとにて物くはむとするに、は<sup>(72)</sup>

かゝしき魚もなし。鯛、鳥など<sup>(73)</sup>

やうありげ也。<sup>(74)</sup>

それに、用経が申すやう、「用経<sup>(75)</sup>

がもとにこそ、津の国なる下人<sup>(76)</sup>

の、鯛のあら巻三つもて、まうで<sup>(77)</sup>

来りつるを、一卷たべこゝろみ侍<sup>(78)</sup>

つるが、えもいはずめでたくさぶ<sup>(79)</sup>

らひつれば、今二巻は、けがさで<sup>(80)</sup>

置きてさぶらふ。<sup>(81)</sup>

いそぎてまうでつるに、下人の<sup>(82)</sup>

候はで、もて参り候はざりつるな<sup>(83)</sup>

り。唯今取につかはさんはいか<sup>(84)</sup>

に」と、声高く、したりがほに、<sup>(85)</sup>

袖をつくるひて、くち脇かいのご<sup>(86)</sup>

ひなどして、はやかりのぞきて申<sup>(87)</sup>

せば、<sup>(88)</sup>

大夫「さるべき物のなきに、いと<sup>(89)</sup>

よき事かな。とくとりにやれ」と<sup>(90)</sup>

のたまふ。<sup>(91)</sup>

のたまふ。<sup>(92)</sup>

客人共モ、「只今可然キ物ノ不候  
ザリツルニ、近来ノ美物ハ鮮ナル  
鯛ゾカシ。

鳥ノ味ヒ糸弊シ、鯉ハタラ未ダ不  
出来ズ。然レバ、生キ鯛ハ極キ物  
ナ、リ」ナド云合ヘリ。

然レバ、茂経、馬引カヘタル童  
ヲ呼ビ取テ、「其ノ馬ヲバ御門ニ  
繫テ、只今走テ殿ノ贄殿ニ行テ、

『其ノ置ツル荒卷三卷、只今遣セ  
給ヘ』ト云テ、取テ来」ト私語キ  
テ、「走レ走レ」ト手搔テ遣ツ。

然テ、返リ参テ、「俎洗テ持詣  
来」ト音高ニ云テ、

「ヤガテ今日ノ包丁茂経仕ラム」  
ト云テ、魚箸削リ、鞆ナル包丁刀  
取出シテ、打鋭テ、

「遅シ遅シ」ト云居タル程ドニ、  
遣ツル童ハ、糸疾ク木ノ枝ニ荒卷  
三卷ヲ結付テ捧テ、走テ持来タ

まら人どもも、「くふべき物のさ  
ぶらはぎめるに、九月ばかりの比  
なれば、

この比鳥のあぢはひいとわろし。  
鯉はまだいでこず。よき鯛は、奇  
異の物なり」などいひあへり。

用経、馬ひかへたる童をよびと  
りて、「馬をば御門のわきにつな  
ぎて、たゞいま走り、大殿に贄殿  
のあづかりの主に、

「その置きつるあらまき、たゞい  
まおこせ給へ」ときゝめきて、  
「ときかはさずもて来。ほかによ  
るな。とく走れ」とてやりつ。

さて、「俎あらひてもて参れ」  
と、こゑたかくいひて、

やがて、「用経けふの庖丁は仕ら  
ん」と云テ、まなほしけづり、さ  
やなる刀ぬいてまうけつゝ、

「あなひさし。いづら来ぬや」な  
ど、心もとながりゐたり。「おそ  
しおそし」といひるたる程に、

り。

茂経此レヲ見テ、「哀レ、飛ガ如ク  
ニ詣来タル童カナ」ト云テ、

俎ノ上ニ荒卷ヲ置テ、事シモ大鯉  
ナドヲ作ラム様ニ、左右ノ袖ヲ引  
疏テ、

片膝ヲ立テ、今片膝ヲバ臥テ、  
極テ月々シク居成シテ、少シ番ミ  
テ、刀ヲ以テ荒卷ノ繩ヲフツク

ト押切テ、刀シテ藁ヲ押シ披タル  
ニ、物共泛レ落ツ。

見レバ、平足駄ノ破タル、古尻切  
ノ壞タル、古藁沓ノ切タル此様共  
ホロ／＼ト泛レ出ヅ。

茂経此レヲ見マ、ニ□テ、魚箸モ  
刀モ打奇テ立走テ、沓モ不履敢ズ  
逃ヌ。

左京ノ大夫モ客人共モ、奇異ク目  
口開テ居タリ。前ナル侍共□テ、

やりつる童、木のえだにあらまき

二つゆひつけて、もてきたり。  
「いとかしこく、あはれ、とぶが  
ごと走りて、まうで来たる童か  
な」と、ほめて、とりて、

まな板のうへにうち置きて、こと  
ごとしく大鯉つくらんやうに、  
左右の袖つくろひ、くよりひきゆ  
ひ、

かた膝たて、今かた膝ふせて、い  
みじくつきぐしくゐなして、あ  
らまきのなはを押しきりて、刀し  
て藁を押しひらくに、ほろ／＼と

物どもこぼれておつる物は、  
ひらあした、ふるしきれ、ふるわ  
らうづ、ふるぐつ、かやうのもの  
のかぎりあるに、

用経あぎれて、刀も、まなほしも  
うち捨て、沓もはきあへず、にげ  
ていぬ。

左京の大夫も、まらうども、あき  
れて、目も口もあきて居たり。前

此モ彼モ云フ事無シ。物食ヒ酒呑  
ツル遊共、興モ無ク成テ、皆冷ジ  
ク成ヌルハ、独立ニ立テ皆去ヌ。

左京ノ大夫ノ云ク、「此ノ尊ハ  
本ヨリ此ク艶ヌ物狂トハ知タレド  
モ、官ノ上ト思テ、常ニ来睦ソレ  
バ、吉トハ不思ネドモ可追キ事ニ  
ハ非ネバ、只、来レバ来ルト見テ  
有ツル也。其レニ、此ル態ヲシ出  
シテ量ヲバ、何ニカハ可為キ。

物悪キ身ハ、墓無キ事ニ触レテモ  
此ク有ル也。何ニ、世ニ人間繼  
テ、「世ノ中ノ咲種ニシ、末ノ世  
マデ物語ニセム」ト云ヒ次テ、空  
ヲ仰テ、「老ノ浪ニ極キ態カナ」  
ト、歎クコト無限シ。

此テ、茂経ハ出走テ馬ニ乗、馳  
散シテ殿ニ参テ、贄殿預リ義澄ニ

なる侍どもも、あさましくて、目  
を見かはして、あなみある顔ど  
も、いとあやしげなり。ものく  
ひ、酒のみつるあそびも、みなす  
さまじく成て、ひとりたち、ふた  
りたち、皆たちていぬ。

左京の大夫のいはく、「此をの  
こをば、かくえもいはぬ痴物狂と  
は知りたりつれども、つかさの大  
夫とて、来むつびつれば、よしと  
はおもはねど、追ふべき事もあら  
ねば、さと見てあるに、かゝるわ  
ざをしてはからんをば、いかゞす  
べき。

ものあしき人は、はかなきことに  
つけても、かゝるなり。いかに、  
世の人聞きつたへて、世のわらひ  
草にせんずらむ」と、空をあふぎ  
て、歎給ふことかぎりなし。

用経は、馬に乗て、はせちらし  
て、殿に参りて、贄殿のあづか

会テ云ク、  
「彼ノ荒卷ヲ惜ト思給ハミ、穩ニ  
得サセ不給デハ非デ、此ル態ヲシ  
給フハ、糸ト情ケ無キ事也」ト、  
哭ヌ許恨ミ嗶ル事無限ナシ。

義澄ガ云ク、「此ハ何ニ宣フ事ゾ。  
義澄ハ荒卷ヲ其ニ奉テ後、要事有  
テ、白地ニ宿リハ罷リ出ツトテ、  
義澄ガ従者ノ男ニ申シ置ツル様、  
「左京ノ属主ノ許ヨリ、此ノ荒卷  
取ニ被遣タラバ、取テ體ニ其ノ使  
ニ取ラセヨ」ト云置テ、罷出テ、  
只今返リ参タル也」ト、

事ノ有様ヲモ不知シテ云ヘバ、義

り、よしずみにあひて、  
「このあらまきをば惜しとおぼさ  
ば、おいらかにとり給てはあら  
で、かゝること、しいで給へる」  
と、泣きぬばかりに、恨のゝしる  
ことかぎりなし。

よしずみがいはいはく、「こは、いか  
にのたまふことぞ。あらまきは奉  
りて後、あからさまにやどにまか  
りつとて、おのがをのこに云や  
う、「左京の大夫のぬしのもとか  
ら、あらまきとりにおこせたら  
ば、とりて夫にとらせよ」と云置  
きて、まかでて、唯今かへり参り  
て見るに、

あらまきなければ、「いづちいぬ  
るぞ」と問ふに、「しかくの御  
つかひ有つれば、のたまはせつる  
やうに、取てたてまつりつる」と  
いひつれば、「さこそはあなれ」  
と、聞きてなん侍る。  
ことこのやうを知らず」といへば、

澄、「然バ、其ノ主ノ云預ケ給ツラ

ム男ノ、四度解無ニコソ有ナル。

其レヲ呼テ、問給ヘ」ト云ヘバ、

義澄、「其男ヲ呼テ問」トテ尋ヌ

ル程ニ、

膳夫ノ有ルガ、此レヲ聞テ云フ

様、

「其ノ事ハ己コソ聞侍ツレ。

己ガ壺屋ニ入居テ聞居テ侍ツレ

バ、此ノ殿ノ若キ侍ノ主達ノ、勇

ミ寵タル数、賛殿ニ御シテ、間木

ニ被捧タル荒卷ヲ見テ、『此ハ何

ゾノ荒卷ゾ』ト被問ツレバ、

誰ガ申ツルニカ有ラム、『此レハ

左京ノ属主ノ御荒卷ヲ被置タル

也』ト答ツレバ、

主達、『然テハ可為キ様有』ト云

テ、荒卷ヲ取下シテ、

鯛ヲ皆取出シテ切食テ、其ノ替

ニハ破タル平足駄ノ片足ヤ、古尻

切ノ壞タルヤ、旧藁沓ノ切タルナ

「さらばかひなくとも、いひあづ

けつらんぬしをよびて問ひ給へ」

といへば、

男をよびて問はんとするに、出て

いにけり。

膳部なる男がいふやう、

「おのれがへやにいりゐて聞つれ

ば、

このわか主たちの、「まきにさゝ

げられたる荒卷こそあれ。こは、

たが置きたるぞ。なんの料ぞ」と

問ひつれば、

たれにかありつらん、「左京の属

の主のなり」といひつれば、

「さてはことにもあらず。すべき

やうあり」とて、とりおろして、

鯛をば、みなきり参りて、かはり

に、ふるしきれ、ひらあしだなど

をこそいれて、まきに置かると聞

「ドロコソ求メテ、籠テ被置ル、ト

聞侍ツレ」ト語レバ、

茂経此レヲ聞テ、嘖り嘖ル事無限

シ。

然レバ義澄ハ、「己レハ更ニ不誤

ヌ事也」トナム云ケル。

其ノ後思ヒ佗テ、「人ノ此ク咲ヒ

嘖シル程ハ不行ジ」ト思テ、長岳

ノ家ニナム籠居タリケル。此ノ事

糞世ニ聞エケレバ、其ノ比ノ物語

ニ、此ノ事ナム語テ人咲ケル。

茂経、其ノ後恥テ、左京ノ大夫ノ

許ヘ否不行ズ成ニケリ。

現ニ否不行ジカシトナム語り伝

タルト也。

『今昔物語集』の文章を上段に、『宇治拾遺物語』の文章を下段に

並べたのは従前どおり。

次に、細部にわたってその文章の相違をおさえてみる。

(1) 今昔では、「□ノ□ト云フ」という、人名を明記しようとい

う意識があるが、宇治にはない。

(2) 今昔では、「古君達」だが、宇治では「古上達部」となってい

き侍つれ」とかたれば、

用経聞きて、しかりのゝしるこ

と、かぎりなし。

この声を聞きて、人々、いとほし

とはいはで、わらひのゝしる。

用経しわびて、かくわらひのゝし

られん程はありかじと思ひて、長

岡の家にこもりあたり。

其後耻テ、左京夫の家にも、え行

かず成にけるとかや。

- (3) 今昔の「極ク」が、宇治では「いみじう」とウ音便化している。さらに、今昔では「古メカシケレバ、」と接続助詞を伴うのに対し、宇治では「ふるめかしかりけり。」と言いつ切っている。
- (4) 今昔の「殊ニ行キモ不為デ、」は宇治では省かれ、「しもわたりなる家に」の後に「ありきもせで」として存在する。宇治には係助詞「ナム」も存在しない。
- (5) 今昔の接続助詞「而ルニ」は、宇治では省かれる。
- (6) 今昔では「有ケル」と連体終止だが、宇治では「有けり」である。
- (7) 今昔では「其ノ職ノ」だが、宇治では「つかさの」である。
- (8) 今昔の「彼ノ」が、宇治では「此」となっている。
- (9) 今昔では「許ニ時々行テ」だが、宇治では「もとにも来て」となっている。
- (10) 今昔では「而ル間、」と接続語が存在するが、宇治にはない。また「茂経」が「用経」となっているのは全編共通である。
- (11) 今昔では「宇治殿ノ盛ニ御マシケル時ニ」と詳しいが、宇治では「大殿に」とあるのみ。今昔では、その説明が読者に必要とされたが、宇治ではその必要がない、言うならば、しても理解の手助けとはならなかったということであろう。
- (12) 今昔では「源ノ頼親ノ朝臣ノ許ヨリ」とあるが、宇治では「頼親が」とあるのみ。(11)と同じレベルでとらえられるべきであろう。
- (13) 今昔では「多取置ケルニ」だが、宇治では「もて参りたり」である。
- (14) 今昔では「□ノ義澄ト云フ者ニ」だが、宇治では「よしずみに」と簡略化されている。不必要とされるものの簡略・省略は、宇治のとする方法の一つである。
- (15) 今昔は「茂経其ノ荒巻ヲ三巻取テ」だが、宇治は「二巻用経ひととりて」であり、今昔の方が詳しい。
- (16) 今昔では「我が職ノ大夫ノ君ニ、此レ奉テ棍リ申サムト云テ」である。これが宇治では位置がさらに後で、「心の中に思けるやう、これわがつかさの大夫にたてまつりて、音づり奉らんと思て」と記されている。
- (17) 今昔では「此ノ荒巻三巻ヲ間木ニ捧置テ」だが、宇治では「まきにさゝげて置くとて」となっている。
- (18) 今昔の「義澄ニ云」が、宇治では「よしずみに云やう」である。
- (19) 今昔では『此ノ荒巻三巻、人ヲ以テ取りニ奉ラム時ニ遣ハセ』ト云置テ、」だが、宇治では『これ、人してとりに奉らん折に、おこせ給へ』といひ置く。」となっている。今昔は「荒巻三巻」をあくまでも明確に、そして宇治では簡略化し、「いひ置く。」で、一度文を切るのである。
- (20) 今昔には、「義澄ハ殿ヲ出テ、」とあるが、宇治にはない。
- (21) 今昔の「大夫」が、宇治では「かんの君」となる。そして、今昔は「来タリ。」と文を切るが、宇治は「二三人ばかり来て、」と後に

続けている。

- (22) 今昔の「大夫、其ノ」が、宇治にはない。
- (23) 今昔の「九月ノ下旬許ノ程ドノ事ナレバ、」が、宇治にはない。
- (24) 今昔の欠語「火□ナドシテ、」は、おそらく宇治と類似の表現が存在したものと思われる。
- (25) 宇治の「我もとにて」は、今昔にはない。
- (26) 今昔の助詞「モ」が、宇治には存在しない。
- (27) 今昔の「茂経指出テ申ス様」が、宇治では「用経が申すやう」と簡略化されている。
- (28) 今昔では「摂津ノ国ニ候フ下人ノ」とあるが、宇治では「津の国なる下人の」と簡略化されている。
- (29) 今昔では「鯛ノ荒巻四五巻許、今朝持来リテ候ツルヲ、」であるが、宇治では「鯛のあら巻三つもて、まうで来りつるを、」と、これも簡略化されている。
- (30) 今昔では「一二巻ハ宿ノ童部ト共ニ食ベ試候ツルニ」であるが、「一卷たべこゝろみ侍つるが」と、これも宇治では簡略化されている。
- (31) 今昔の「鮮カニ」が、宇治にはない。
- (32) 今昔では「今三巻ハ穢シ不候ハズシテ置テ候ツルヲ、」であるが、宇治では「今二巻は、けがさで置きてさぶらふ。」となっている。宇治の簡略化、そして文の言い切り化である。
- (33) 今昔では「罷り出デ候ツル程ニ」だが、宇治では「まうでつる

に」となっている。

- (34) 今昔の「不候シテ」が、宇治では「候はで」となっている。
- (35) 今昔では「否持参リ不候ザリツルニ、」だが、宇治では「もて参り候はざりつるなり。」と、言い切り化している。
- (36) 今昔の「音ヲ捧テ」が、宇治では「声高く」となる。
- (37) 今昔の「去張リテ」が、宇治にはない。
- (38) 今昔では「口脇ヲ下ゲ、袖䟽ヲシテ、延上申セバ」とあるが、宇治では「袖をつくるひて、くち脇かいのごひなどして、はやかりのぞきて申せば」となっている。この部分は、簡略化ではなくて、むしろ宇治の詳細化である。人物の動作を詳しく描こうという意識がなせるわざであろう。
- (39) 今昔の「左京ノ大夫」が、宇治では「大夫」となっている。
- (40) 今昔では「只今無カリツルニ」だが、宇治では「なきに」である。
- (41) 今昔の「云フ」が、宇治では「のたまふ」となっている。
- (42) 今昔では「只今可然キ物ノ不候ザリツルニ、近来ノ美物ハ鮮ナル鯛ゾカシ。」とあるが、宇治では「くふべき物のさぶらはざるに、九月ばかりの比なれば、」となっている。今昔の「只今」が、宇治にはない。今昔の「不候ザリツルニ」が、宇治では「さぶらはざるに」となっている。また今昔では言い切りだが、宇治では接続助詞「ば」で後に続く。ただし、今昔の「近来ノ美物ハ鮮ナル鯛ゾカシ。」と、宇治の「九月ばかりの比なれば、」は内容がまったく異なるので、

位置が同じであるにとどめておくことにする。

- (43) 宇治の「この」が、今昔にはない。
- (44) 今昔の「鯉ハタラ」が、宇治では「鯉は」となっている。
- (45) 今昔の「然レバ」が、宇治にはない。
- (46) 今昔では「生き鯛ハ極キ物ナ、リ」であるが、宇治では「よき鯛は、奇異の物なり」となっている。今昔の「生き鯛」「極キ」「ナ、リ」が、それぞれ宇治では「よき・」「奇異の」「なり」となっている。
- (47) 今昔の「然レバ」が、宇治には存在しない。
- (48) 今昔の「其ノ」が、宇治には存在しない。
- (49) 今昔の「御門ニ」が、宇治では「御門のわきに」となっている。
- (50) 今昔は「只今走テ」と接続助詞があるが、宇治は「走り」と連用形で続けていく。また、「殿の贄殿ニ行テ」という今昔の部分が、宇治では「大殿に贄殿のあづかりの主に」となっている。
- (51) 今昔の「三卷」が、宇治には存在しない。
- (52) 今昔の「ト云テ、取テ来」が、宇治には存在しない。
- (53) 今昔では『走レ走レ』ト手搔テ遣ツ』であるが、宇治では『とさかはさずもて来。ほかによるな。とく走れ』とてやりつ。』と詳細化している。動作を詳しく述べるのは宇治の特徴である。
- (54) 今昔の「返リ参テ」が、宇治には存在しない。
- (55) 今昔の「持詣来」が、宇治では「もて参れ」となっている。

- (56) 今昔の「音高ニ」が、宇治では「こ多たかく」となっている。
- (57) 今昔では「今日ノ包丁茂経仕ラム」とあるが、宇治では「用経けふの包丁は仕らん」となっている。
- (58) 今昔では「包丁取出シテ」だが、宇治では「刀ぬいて」と簡略化されている。
- (59) 今昔「打鋭テ」が、宇治では「まうけつ」となっている。
- (60) 宇治には『あなひさし。いづら来ぬや』など、心もとながりゐたり。』とあるが、今昔には存在しない。
- (61) 今昔は「遣ツル童ハ」と係助詞「ハ」が存在するが、宇治には存在しない。
- (62) 今昔では「糸疾ク木ノ枝ニ荒卷三卷ヲ結付テ捧テ」とあるが、宇治では「木のえだにあらまき二つゆひつけて」となっている。
- (63) 今昔の「茂経此レヲ見テ」は、宇治には存在しない。
- (64) 宇治の「いとかしこく」は、今昔にはない。
- (65) 今昔では「飛ガ如クニ詣来タル」だが、宇治では「とぶがごと走りて、まうで来たる」となっている。(64)と同レベルで、状況が把握の必要をもつ時は詳細化するのが宇治の特徴と見えよう。
- (66) 今昔の「云テ」が、宇治では「ほめて」となっている。
- (67) 宇治には「とりて」とあるが、今昔にはない。
- (68) 今昔では「荒卷ヲ置テ」だが、宇治では「うち置きて」となっている。
- (69) 今昔では「事シモ」だが、宇治では「ことごとしく」となっている。



いる。

(70) 今昔の「大鯉ナドヲ」が、宇治では「大鯉」となっている。

(71) 今昔では「袖ヲ引䟽テ」だが、宇治では「左右の袖つくろひ」である。

(72) 宇治の「くゝりひきゆひ」が、今昔には存在しない。

(73) 今昔の「片膝ヲ」が、宇治では「かた膝」と助詞の「を」を欠く。

(74) 今昔の「今片膝ヲバ」が、宇治では「今かた膝」と、「をば」を欠いている。これは(73)と同じである。

(75) 今昔の「極テ」が、宇治では「いみじく」となっている。

(76) 今昔の「少シ喬ミテ」が、宇治には存在しない。

(77) 今昔の「フツくト」が、宇治には存在しない。

(78) 今昔の「押し披タルニ」が、宇治では「押しひらくに」となっている。

(79) 宇治の「ほろくと」が、今昔には存在しない。

(80) 今昔では「泛レ落ツ」だが、宇治では「こぼれておつる物は」となっている。

(81) 今昔の「見レバ」は、宇治には存在しない。

(82) 今昔の「平足駄ノ破タル」が、宇治では「ひらあしだ」のみである。

(83) 今昔の「古尻切ノ壞タル」が、宇治では「ふるしきれ」のみであり、これは(82)と同一である。

(84) 今昔では「古藁杵ノ切タル」だが、宇治ではその「切タル」が欠け、さらに「ふるぐつ」が加わっている。

(85) 今昔では「此様共ホロくト泛レ出ツ」だが、宇治では「かやうのもののかぎりあるに」となっている。これは位置的な対応であって、今昔の「ホロくト」は、(79)と対照されるべきであろう。ここは、今昔の文意を、宇治がくみとってわかりやすくしたものと考えてみたい。

(86) 今昔の「此レヲ見マ、ニ」が、宇治では「あきれて」となっている。これも宇治の方がわかりやすい。

(87) 今昔の「魚箸モ刀モ」が、宇治では「刀も、まなばしも」と、順序が逆になっている。

(88) 今昔の「立走テ」が、宇治には存在しない。

(89) 今昔の「逃ヌ」が、宇治では「にげていぬ」となっている。

(90) 今昔の「客人共」が、宇治では「まらうど」である。

(91) 今昔の「奇異ク」が、宇治では「あきれて」である。

(92) 今昔の「目口」が、宇治では「目も口も」である。

(93) 今昔の「侍共」が、宇治では「侍ども」である。

(94) 今昔の「□テ」の欠字が、宇治では「あさましくて」となっている。

(95) 今昔では「此モ彼モ云フ事無シ」であるが、宇治では「目を見かはして、あなみあたる顔ども、いとあやしげなり」となっている。宇治の、動作の詳細化である。

(96) 今昔の「遊共」が、宇治では「あそびも」となっている。

(97) 今昔では「興モ無ク成テ、皆冷ジク成ヌルハ」とあるが、宇治では「みなすさまじく成て」のみである。

(98) 今昔では「独立ニ立テ皆去ヌ」であるが、宇治では「ひとりたち、ふたりたち、皆たちていぬ」と、宇治の方がわかりやすくなっている。

(99) 今昔の「尊ハ」が、宇治では「をのこをば」となっている。

(100) 今昔の「物狂」が、宇治では「痴物狂」となっている。

(101) 今昔の「知タレドモ」が、宇治では「知りたりつれども」となっている。

(102) 今昔では「官ノ上ト思テ」であるが、宇治では「つかさの大夫とて」となっている。

(103) 今昔の「常ニ」が、宇治には存在しない。

(104) 今昔の「不思議ドモ」が、宇治では「おもはねど」となっている。

(105) 今昔の「可追キ事ニハ非ネバ」が、宇治では「追ふべき事もあらねば」となっている。

(106) 今昔では「只、来レバ来ルト見テ有ツル也」だが、宇治では「きと見てあるに」と簡略化されている。

(107) 今昔の「其レニ」が、宇治には存在しない。

(108) 今昔の「シ出シテ」が、宇治では「して」となっている。

(109) 今昔の「身」が、宇治では「人」となっている。

(110) 今昔の「触レテモ」が、宇治では「つけても」となっている。

(111) 今昔の「此ク有ル」が、宇治では「かゝる」となっている。

(112) 今昔では「世ニ人聞継テ」だが、宇治では「世の人聞きつたへて」である。

(113) 今昔では「世ノ中ノ咲種ニシ、末ノ世マデ物語ニセム」とあるが、宇治では「世のわらひ草にせんずらむ」となっている。推量(意志)の「ム」が、「んずらむ」になっているところに注目したい。

(114) 今昔の「云ヒ次テ」が、宇治には存在しない。

(115) 今昔の「老ノ浪ニ極キ態カナ」が、宇治には存在しない。

(116) 今昔の「此テ」が、宇治には存在しない。

(117) 今昔の「出走テ」が、宇治には存在しない。

(118) 今昔の「馬ニ乗、」が、宇治では「馬に乗て、」と接続助詞をともなう。

(119) 今昔の「云ク」が、宇治には存在しない。

(120) 今昔では「彼ノ荒卷ヲ」だが、宇治では「このあらまきをば」となっている。

(121) 今昔の「思給ハッ」が、宇治では「おぼさば」となっている。

(122) 今昔では「穩ニ得サセ不給デハ非デ」だが、宇治では「おいらかにとり給てはあらで」となっている。今昔の漢文訓統調、宇治の和文調の差が明らかな例である。

(123) 今昔では「此ル態ヲシ給フハ、糸ト情ケ無キ事也」だが、宇治では「かゝること、しいで給へる」で、簡略化されている。

(124) 今昔の「義澄ハ」が、宇治には存在しない。

(125) 今昔では「荒卷ヲ其ニ奉テ後」だが、宇治では「あらまきは奉りて後」である。

(126) 今昔の「要事有テ」が、宇治には存在しない。

(127) 今昔では「宿リハ罷リ出ツトテ」だが、宇治では「やどにまかりつとて」となっている。

(128) 今昔では「義澄ガ従者ノ男ニ申シ置ツル様」だが、宇治では「おのがをのこに云やう」となっている。宇治の簡略化である。

(129) 今昔の「左京ノ属」が、宇治では「左京の大夫」となっている。

(130) 今昔の「許ヨリ」が、宇治では「もとから」となっている。

(131) 今昔の「此ノ」が、宇治には存在しない。

(132) 今昔の「髓ニ其ノ使ニ」が、宇治では「夫に」となっている。

(133) 今昔では「只今返リ参タル也」だが、宇治では「唯今かへり参りて見るに」となっている。

(134) 宇治の「あらまきなければ、……聞きてなん侍る。」が、今昔には存在しない。

(135) 今昔では「事ノ有様ヲモ不知シテ云へば」だが、宇治では「このやうを知らず」である。

(136) 宇治の「かひなくとも」が、今昔には存在しない。

(137) 今昔では「其ノ主ノ云預ケ給ツラム男ノ、四度解無ニコソ有ナル。其レヲ呼テ、問給へ」であるが、宇治では「いひあづけつらんぬ

しをよびて問ひ給へ」となっている。宇治の簡略化である。

(138) 今昔では「義澄、『其男ヲ呼テ問』トテ尋ヌル程ニ、」だが、宇治では「男をよびて問はんとするに、出ていにけり。」となっている。宇治では簡明で、言い切りの形をとるのである。

(139) 今昔では「膳夫ノ有ルガ、此ヲ聞テ云フ様」だが、宇治では「膳部なる男がいふやう」と、説明が簡略化されている。

(140) 今昔の「其ノ事ハ己コソ聞侍ツレ」が、宇治には存在しない。

(141) 今昔の「壺屋」が、宇治では「へや」になっている。

(142) 宇治の「聞つれば」が、今昔には存在しない。

(143) 今昔の「若キ侍ノ主達ノ」が、宇治では「このわか主たちの」となっている。

(144) 今昔の「勇ミ寵タル数、贄殿ニ御シテ」が、宇治には存在しない。

(145) 今昔の「荒卷ヲ見テ」が、宇治では「荒卷こそあれ」となっている。

(146) 今昔では「此ハ何ゾノ荒卷ゾ」だが、宇治では「こは、たが置きたるぞ。なんの料ぞ」と、わかりやすく言いかえている。

(147) 今昔では「誰ガ申ツルニカ有ラム」だが、宇治では「たれにかありつらん」となっている。

(148) 今昔の「此レハ左京ノ属主ノ御荒卷ヲ被置タル也」が、宇治では「左京の属の主のなり」と簡略化されている。

(149) 今昔の「答ツレバ」が、宇治では「いひつれば」となっている。

る。

(150) 今昔の「主達」が、宇治には存在しない。

(151) 宇治の「ことにもあらず」が、今昔には存在しない。

(152) 今昔の「荒巻ヲ」が、宇治には存在しない。

(153) 今昔では「皆取出シテ切食テ」だが、宇治では「みなぎり参りて」である。

(154) 今昔の「其ノ替ニハ」が、宇治では「かはりに」となっている。

(155) 今昔では「破タル平足駄ノ片足ヤ、古尻切ノ壞タルヤ、旧藁沓ノ切タルナドヲコン求メテ」だが、宇治では「ふるしきれ、ひらあしだなどをこそいれて」と簡略化されている。

(156) 今昔の「籠テ被置ル」が、宇治では「まきに置かる」である。

(157) 今昔の「此レヲ」が、宇治には存在しない。

(158) 今昔では「然レバ義澄ハ、『己レハ更ニ不誤ヌ事也』トナム云ケル」だが、これに対応する宇治は「この声を聞きて、人々、いとはしとはいはで、わらひのゝしる」となっている。「わらひのゝしる」とあった方が、当然、続く部分との関係が活きてくる。

(159) 今昔の「其ノ後思ヒ佗テ」が、宇治では「用経しわびて」となっている。

(160) 今昔では「人ノ此ク咲ヒ嘸シル程ハ」だが、宇治では「かくわらひのゝしられん程は」となっている。

(161) 今昔の係助詞「ナム」は、宇治には存在しない。

(162) 今昔の「比ノ事髣世ニ……人咲ケル」が、宇治には存在しない。

(163) 今昔の「茂経」が、宇治には存在しない。

(164) 今昔の「恥テ」が、宇治には存在しない。

(165) 今昔の「許へ」が、宇治では「家にも」となっている。

(166) 今昔の「成ニケリ」が、宇治では「成にけるとかや」となっている。

(167) 今昔の「現ニ否不向ジカシトナム語り伝タルト也」が、宇治には存在しない。

### 3 おわりに

以上、長文の説話であったので、一話のみ比較対照し、検討してみた。今昔が説明調であるのに対し、宇治はその簡略化をめざすということは、この一話でもやはりうかがえるのであった。ただし、詳細化も時に見られるのである。この詳細化は、人の動作等、滑稽さを表わす場合に顕著である。

説明は簡略化し、滑稽な部分は詳細化するのである。かたくるしい説話から、笑いの説話へと移行しているのは確かである。今回も最終的な結論はさしひかえ、さらに続けて研究をおしすすめるつもりである。

(本学教授)

本稿は昭和五十六年度特別研究費の助成を受けたものである。